



経営者の自律性 役員人事の分析

日野, 恵美子

(Degree)

博士 (経営学)

(Date of Degree)

2009-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4559

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004559>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	日野 恵美子
博士の専攻分野の名称	博士（経営学）
学 位 記 番 号	博い第 4559 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 21 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

経営者の自律性 役員人事の分析

審 査 委 員

主 査	教 授	三品 和広
	教 授	加護野 忠男
	教 授	桑原 哲也

論文内容の要旨

コーポレート・ガバナンスの議論は、企業の法的な所有者たる株主と、彼らが経営を委託する経営者の間の利害の不一致に注目し、経営者を株主の意に沿って動かすためのモニタリングのあり方、または不一致を埋めてしまう報酬スキームの設計を主要な論点とする。審査対象の論文は、そこに新たな視点を提示する。経営者の待つ絶大な権限を問題視する点は従来と同じであるが、それを一方的に制限することが、望ましくない事態の発生を抑える効果を持つのみならず、望ましい事態の実現を妨げる方向に作用しかねない危険性をはらむことも視野に取り込む点が、大きく異なっているのである。この危険性が第三者による他律への期待を引き下げるため、必然的に経営者自身による自律の可能性に目が向かう。日野論文は、このような発想を基礎として、その現実妥当性を大規模データで検証したものである。

この論文が中心テーマに据える自律とは、直接的には経営者の内面的な精神作用を指しているものの、経営者が最大化する自らの効用は、単に個人所得から必要経費を差し引いて計算される個人利得に一致せず、それ以外の要素を含むと主張するに等しい。これが抽象的な概念に留まるのであれば、学術上の意味が大きいとは言えないが、日野論文の貢献は、これを測定する方法に発想が及んだ点にある。具体的に言えば、経営者が自らの言動を日頃から律する第一義的な自律性は直接測定できないが、自らの第一義的な自律性を100%信頼せず、自分が間違った判断を下そうとしているときにそれを指摘してくれる人間に地位を与え、自らの傍らに置く第二義的な自律性は、有価証券報告書の役員の状況欄を見れば有無を判別できるというのである。この見解を凝縮したのが、論文の題目に他ならない。

論文の第一章は、研究の契機となった現実の観察を記述する。取り上げたのは、キヤノンと三越の対比である。第二章は、主に米国を中心として進められたトップ・マネジメント・チームに関する一連の研究をレビューする。ここでは、従来の研究が経営者の自律性に着目するに至っていないことを確認する。第三章はデータの出所と整理の方法を記述する。200社を超える企業を分析の対象として、戦後期をカバーするとなると、データの収集と一口に言っても一筋縄でいくものではない。そこで脱落するデータは分析にバイアスを持ち込む可能性があるため、記述は慎重を極めている。続く第四章が予備的な分析結果を紹介し、第五章が仮説検証的な分析結果を提示す

る。最後の第六章は、分析結果を取りまとめ、含意を議論する。

経営者の第二義的な自律性が確認される企業の方が、そうでない企業よりも概して超長期の利益成長を実現するという当初の仮説については、概ね支持されたが、例外も少なからず散見されるという状態で、この論文は終わっている。その意味で決着の始まりという域を超えないのは確かであるが、自律性という概念に一つの形を初めて与え、そのポテンシャルをハイライトすることには成功している。一言で要約すれば、この論文はそのような性格を有している。

論文審査の結果の要旨

審査員三名は、この論文の学術性の高さについて意見の一致を見た。確かな文献レビューに基づいて、分析フレームワークを打ち立てている点、中心に据える自律性という概念のオリジナリティの高さ、それを大規模データで検証しようという研究者としての姿勢、データ分析が実直で、仮説に従わないデータの存在を明確に記述する点など、評価すべき美点は多い。

経営史の立場から見れば、第一章で取り上げたケースの数が少ない、また取り上げたケースの解釈もまだまだ浅いという指摘が出たことは記しておくが、経営史への貢献と位置づけられた論文ではないことから、この指摘が論文の本質的な価値を損なうものでないことは審査員全員が認めるところである。

この論文は、萌芽的な取り組みに付きものの粗さを内包する。期待したほど白黒のはっきりした結論に至らなかったのも、サンプルのセレクションに拠るところはなしとしない。しかし、これらは時間はかかるものの、容易に改良できる点で、著者が今後の研究者生活のなかで、徐々に解決していくものと思われる。そのような長きにわたる積み重ねの礎石となりうる土台を築き上げたという点で、この論文は高い評価に値する。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士（経営学）の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

平成21年3月6日

審査委員 主査	教授	三品 和広
	教授	加護野忠男
	教授	桑原 哲也